

氏名	成 本 理 香		
学位の種類	博士（音楽）		
学位記番号	博音第2号		
学位授与年月日	平成26年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当者		
題目	学位論文題目	日本の伝統音楽から着想を得た戦後日本の前衛音楽作品について —— 松平頼則と湯浅譲二の作曲技法を中心に ——	
学位論文等 審査委員	(演奏審査)	主 査 教 授	久 留 智 之 副 査 教 授 増 山 賢 治 副 査 教 授 村 田 四 郎 副 査 教 授 小 林 聡 (論文審査 及び最終 試験)
		主 査 教 授	久 留 智 之 副 査 教 授 増 山 賢 治 副 査 教 授 村 田 四 郎 外 部 審査員 教 授 水 野 み か 子 (名古屋市立大学教授)
学 位 論 文 の 要 旨			
<p>本論文は、日本の伝統音楽から着想を得た戦後日本の前衛音楽作品、特に1950年代と1960年代の作品について、その代表的存在である松平頼則と湯浅譲二の作品をとりあげ、具体的な技法を明らかにすることを目的としている。</p> <p>日本人による西洋音楽の創作がはじまったのは19世紀終わりから20世紀初頭にかけてである。最初期の創作のスタイルは、ヨーロッパの様式を模範としていた。その一方で日本の伝統音楽や民族音楽に着目して創作する作曲家が現れ始める。民族派と呼ばれたその作曲家たちは、自作品に日本の伝統音楽の旋法、民謡のリズムなどの素材を直接的に取り入れた。第二次世界大戦後、日本の伝統音楽の要素の、直接ではない取り込み方法を模索し始める作曲家たちが登場する。特に1950年代から、その関心は音楽表面にある音素材より、日本の伝統音楽の「テクスチュア」や「間」など、さらに進んだものに向かっていった。1960年代は後に「現代音楽の季節」と言われるような、現代音楽の隆盛をみた時代である。この60年代を支えたエネルギーは全世界的なものであった。ヨーロッパだけでなくアメリカからも実験音楽を始め新しい価値観やそれに基づく音楽が日本に紹介された。ここにおいても日本の伝統音楽からさまざまな要素が取り込まれ、日本独自の現代音楽が創出された。そしてこの「現代音楽の季節」は1970年の大阪万博で頂点に達する。</p> <p>近年、近代日本音楽史の研究は盛んに行われ、多数の書籍や論文が執筆されている。しかし、戦後の前衛音楽作品について、日本の伝統音楽からの影響を受けた作品に特化してまとめて論じられているものは数少ない。また、作品の具体的な分析によってその技法に言及した研究もあまり見られない。そこで本論文では、具体的な作品分析に基づいて、日本の伝統音楽から着想を得た作曲家は、実際にどのようにそれを取り込んで作曲したのか</p>			

を明らかにする。

本論文は4章から構成される。

第1章では、戦後（一部戦前）から1970年頃までの間に、日本の伝統音楽から着想を得た作曲家たちについて概観している。戦争直後の1946年から1973年頃までの音楽雑誌『音楽芸術』（音楽之友社）を精査すると実に多くの作曲家たちが日本の伝統音楽に関心を持って作曲していたことがわかる。本章では、作曲家達が日本の伝統音楽のうちどのような素材へ注目したのかという観点から下記の6つの分類を行い、作曲家とその作品の傾向について論じる。

- ①戦前に「民族派」と呼ばれ、戦中を経て戦後に至るまで創作を続けた作曲家たち。
- ②邦楽器に着目した作曲家たち。
- ③民謡や民族芸能などに着目した作曲家たち。
- ④雅楽や能に着目した作曲家たち。
- ⑤日本のみならず、その関心をアジアに広げた作曲家たち。
- ⑥日本の伝統音楽の研究にも取り組んだ作曲家たち

前述の音楽芸術の精査やこれらの分類や概観により、1945年頃から1970年頃までの間に時代の流れを見ることもできる。それは、日本の伝統音楽のみに着目して作曲する時代と、それに続く、伝統音楽に加えて他分野の芸術や思想をもちこみながら独自の語法の確立を目指した時代という二つの時代である。

第2章では松平頼則(1907-2001)、第3章では湯浅譲二(1929-)に焦点を当てた。この二名は、第1章で行った分類の中では、④の「雅楽や能に着目した作曲家たち」に、また、二つの時代では、松平が「日本の伝統音楽のみに着目して作曲する時代」、湯浅が「伝統音楽に加えて他分野の芸術や思想をもちこみながら独自の語法の確立を目指した時代」にそれぞれ属する。この二名を取り上げたのは、次の二つの理由からである。一つは両者とも、短期間だけ、あるいは、少数の作品だけが日本の伝統音楽との関わりを持つのではなく、長きにわたり、日本の伝統音楽と結びつきを持って作曲してきている点であり、もう一つは常に西洋の前衛の技法にも敏感であり、日本の伝統音楽を直接的に自作品に取り込まず、素材として使いながらも、独自の語法を確立させている点である。

第2章では、松平頼則の1953年の作品である《催馬楽によるメタモルフォーズ》を中心に具体的な分析を行い、彼が雅楽の何に着目し、いかに自作品に取り込んだのかを明らかにしている。松平が雅楽と十二音技法を結合させたのはよく知られているが、詳細に作品分析を行うと、それ以外にも雅楽を自作品に取り込むにあたって、松平自身が雅楽を様々な方向から緻密に分析した上で様々な作業が行われていることが明らかになった。それは、雅楽におけるオーケストレーション、各楽器の役割や特徴的な音型、楽器の構造にまでも及んでいた。そうして得た分析結果を組み合わせ、また、当時の前衛の技法であった西洋の音列作法なども用いながら彼の語法を確立させていた。

第3章では、湯浅譲二の1963年の作品である《二つのフルートによる相即相入》を中心とした分析を行っている。湯浅は、能のなかでも時間構造に特に強い関心を示している。彼が能をどのようにして自作品に取り込んだのか、時間構造に注目した分析を行った。松平と同じく、能そのものを深く理解した上で創作にあたっているが、湯浅の場合は、能の

時間構造を一旦自分の言葉や思考などで捉え直し、その後作品に応用していた。そしてその際には、他分野の思想や哲学、例えばトポロジーの理論、禅やサルトルの思想などを用いて、自分自身の言葉に置き換える作業をしていた。

第4章では、第2章と第3章の分析を踏まえて、二人の共通点と相違点を検討し、日本の伝統音楽に着想を得て自作品に取り込む創作とは、具体的にどういう方法であったのかについて考察した。共通しているのは、着想の源である日本の伝統音楽への深い理解と詳細な分析や思考である。この姿勢が、日本の伝統音楽の要素を直接的にはではなく、それらを応用して自分の語法として取り込むことを可能にしたと考えられる。そして、作曲の際には十二音技法を始めとする前衛の手法を持ち込んだ点も共通している。一方で、相違点も見られる。松平は雅楽に対して、あくまでも自身の作曲の素材として接していたが、湯浅は子供の頃から稽古をしていたこともあり、作曲の要素として接するよりも以前から能を相当程度に理解していたと考えられる。また、松平が抽出した要素は、雅楽の旋法など音素材として表面的にとらえられ易いものだけではなく、さらにその奥にある音楽的要素、オーケストレーションや楽器の構造にまで掘り込まれている。湯浅は、音楽に表出している事象よりも、それらを生み出す母体にある「思考の構造」にこそ興味があると自身で述べているように、音楽の生まれるさらにその前段階にまで着目し、他分野の哲学や思想をも駆使した。

戦前には作曲家たちが「日本の伝統音楽」を直接的に作品に取り込むスタイルは、戦後いくつかの傾向に分かれた。その中で、発想の源である日本の伝統音楽の探求や分析を全方向から徹底的に行って応用した松平と、そこに他分野の思想を持ち込みながらも自身の思考と言葉で捉え直し抽象化するという作業をした湯浅の二人がとった方法は、二つの時代をそれぞれ代表する音楽を創造してきた。そういう意味では、二人はそれぞれの時代を牽引し、さらに、この二人がそれぞれの時代の最先端に立って、それぞれの時代を作ってきたと言えるかもしれない。

演奏審査結果の要旨

「日本の伝統音楽から着想を得た作品」というテーマのもとに作曲年代順に並べたプログラムは、作曲家の個展として構成的にわかりやすいものであった。このテーマは自身の博士学位申請論文である「日本の伝統音楽から着想を得た戦後日本の前衛音楽作品について -松平頼則と湯浅譲二の作曲技法を中心に-」と密接なつながりがあるものであり、論文と実技の相乗作用も感じられる内容であった。

曲は細棹三味線独奏に始まり、ヴァイオリン独奏曲、2本のクラリネットの二重奏曲、声を含む中規模の室内楽作品と続き、最後が世界初演になるヴァイオリンとピアノの二重奏曲で編成的にもヴァリエティに富むものであった。一流の演奏家を招いたこともあり、演奏の質もどの曲も大変高いもので、作曲者の意図をよく反映していた。プログラムが進むにつれ作品の充実度も増し、作曲家のこのテーマに対する掘り下げが如実に感じられた。また、各演奏の合間に作曲家のトークを挿入した形で進行したが、博士学位申請リサイタルにふさわしいものであったとの声が多かった。以上、総合して大変高い水準で合格と評価した。

論文審査結果の要旨

本学位申請者は、研究当初から現代を生きる作家として日本伝統音楽とどのように対峙するかという問題意識があったが、本論文の課題設定に至るまでには紆余曲折があった。最初は「浄瑠璃音楽〈一中節〉の拍節構造を中心とした自作品への応用方法の開発」として研究を開始し、実際に三味線の稽古に通い、伝統音楽を肌で感じ取る体験を通して音楽が内包する美学について考察を行った。また、ここから得られた体験とその後の楽曲分析および奏者への聞き取り調査などを応用して実作を行った。このような取り組みから、より普遍性のある本論文のテーマ設定に行き着いたわけである。日本における西洋音楽の創作の歴史は、まだ長くなく数多くの作家が「日本」という民族の固有性の問題について、その時々でアプローチしているが、本論文ではそのアプローチ方法についてこの方面に業績の高い二人の傑出した作家を選択し、調査分析し、そのオリジナルな作曲プロセスについて図式化し解析することに成功している。松平の雅楽への関心があくまで素材の抽出にあったこと、湯浅の能への関心が時間構造にあったというように作曲家により対象となる日本伝統音楽と、その関心の観点は異なるため分析方法もそれに合わせて変化するが、最終的にそれぞれの伝統音楽へのアプローチ方法についてモデル化・記号化して解説している点は、優れてオリジナルであり理解しやすい。方法日本の研究は、より多くの作家の調査研究・分析の集積から少しずつ解明されてゆくだろう性格のものであるに違いなく、一章に名前が挙がっている他の作曲家についても、同様にモデル化して解析することを継続研究としてほしい。なぜなら、それにより西洋音楽の創作について歴史の浅い日本の芸術音楽が根無し草的な生命力のないものにならないための指針を得られるだろうからである。また、本論文は西洋音楽受容後の日本音楽史的観点から見ても適切な文献を検討し、二人の作家を位置付けたことの意味合いにおいて高く評価される。

最終試験結果の要旨

本学位申請者は、すでに相当のキャリアのある作曲家として活動している。自身の作曲方法論探究のため本学に入学した経緯がある。この目的は、上記のように強くリンクした学位申請論文と学位申請リサイタルにより一つの回答を得たように思う。特に学位申請リサイタルの最後の世界初演作品は、日本伝統音楽から着想を得るという本研究成果を応用し、今後の創作につながる独自の方法論を試みたものであり、これからのこの方向での成果が期待されるものである。よって総合して本学表現系に相応しい内容になっており、優秀な成績での合格と判断したものである。